

---

# 朔望の月

お春

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

朔望の月

### 【Nコード】

N9428Z

### 【作者名】

お春

### 【あらすじ】

もしも、めんどくさがりの女子高生が、不思議な世界に迷い込んだら。

少女、2人（前書き）

一応、和風ファンタジーを目指しています。

不思議の国のアリスをモチーフとしていますが、微妙です…。

未熟ですが、どうぞよろしくお願いします（^^）

## 少女、2人

森月 朔。16歳。

日本人。一応女子高生。

只今、自宅で宿題中。

「朔ー、あんたほんとに女子高生？」

「うん、まあ。…なんで？」

朔はため息をつく友人をみて、首を傾げた。

「…あんた、人からよく、変わってるね〜とか言われない？」

「…」

「凶星か…」

もう一度、深いため息をついたのが、

星野 結衣子。同じく16歳。

高校入学時にできた、朔の友達。

そして彼女は、朔にとっての最後の友人である。

高校に入学したての頃は、朔の周りには友達と呼べる人たちが沢山いた。

帰りに同じクラスの男子について話したり、休日に遊んでプリクラを撮ったりもした。

が。

4月中に、友人と呼べる人の数は半分に減った。

5月には、半分が半分になった。

6月には、数える程度に。

7月は変わらず。

そして夏休み真っ盛りの8月。

あれだけいた友達が、遂に1人になった。

理由はわかっている。

この、めんどくさがりな性格。

何をするにも適当で、最初こそ合わせていた話も、途中でめんどくさくなってやめる。

外に出るよりも家で寝ている方が好きな極度の出不精。

なのに興味のある事は熱中したら止まらない。

周りから、一緒にいてもつまらないと言われるのも、納得できる。

本当は、それじゃあだめだとわかってはいるものの、なかなか直せない。

というか、直すのすらめんどくさい。

それが彼女の性分なのだ。

「…部屋も汚いし…あんたさあ、そういうところがだめなんだって。

…聞いている?」

聞いている?

突然の問いかけに、朔は戸惑った。

全くと言っていいほど、耳に入らなかった。

「…ごめん、聞いてない」

正直に、そう言う。

「…そうだね。あんたに説教しても聞くわけないよね。っていうか、そこは普通聞いているって言うべきじゃない?」

結衣子は半分呆れたように朔から視線を外した。

暑いのか、流れる汗をタオルで拭う。

だって、嘘ついたら後がめんどくさいじゃん。

…とは言わず。

「次からそうする」

「…」

はあ、とまたため息をつかれる。

今日で3回目。

会ってまだ10分足らず。

「結衣子、宿題やる」

がっくりと肩を落とす彼女に朔は声をかける。

とりあえず、今日の目的を果たしてから結衣子のため息について考えよう。

朔は目の前にある問題集を一冊とり、問題を解き始める。

「…自由人め…」

それをみて、結衣子がぼつりとこぼした言葉も、朔の耳には入らない。

頭を巡るのは、数字と記号と公式。

心地よいリズムにのって、手に持つペンが踊る。

勉強は、朔にとって苦痛ではない。

特に考え込むこともなく、答えがわかるから。

元友達の中の何人かに、頭がいいね、と言われたから多分そうなのだろう。

比較をしたことがないから、いまいちよくわからないけれど…。

とりあえず、人間関係よりも何千、何万倍も楽なことは確かだ。

「ねー、朔」

しばらくして、結衣子の声が聞こえた。

見れば彼女が、下敷きでパタパタと顔をあおぎながら、斜め上を見

つめている。

「なに？」

「あつい」

なるほど、結衣子はエアコンを見ていたらしい。  
でも残念。

「…図書館行く？」

「なんでよ」

「これ、壊れてるから」

去年の夏、宿題奮闘中にいきなり温風がふいて、それからすぐに風すらふかなくなった。

「…」

結衣子はある得ないというような目で朔を見つめてきた。

「…行かない？」

「アイス、奢ってよ」

エアコンを買いに行くより、そっちのがまし。

買いに行くのなんて、めんどろな事の極みだしね。

朔は頷くと、荷物をまとめ、結衣子と共に部屋を出た。

階段を降りて、玄関で靴を履く。

サンダルがよかったけど、スニーカーしかないからそれを履いた。

「…あ」

「どうしたの？」

「…財布忘れた」

めんどろさいが、取りに行かないと。

アイスが買えない。

「あんたねえ…」

結衣子が呆れたような声を出す。

靴を履いたままの状態で、部屋まで行こうとする朔の耳には、はあ、という結衣子の小さなため息が聞こえた。

… 4回目。

そろそろ結衣子も私から離れてゆくのかな。

何となく察しはついていた。

彼女のため息の理由。

それでも、離れていったらいいだけだ。

いつものように、友達から元友達にカテゴリーを変えるだけ。

他の子たちの方に行っただって別に。

引き止める理由なんてないんだし。

ひとりぼっちは慣れている。

… ああ、でも。

「はあ…」

ただ少しだけ、心の奥底で泣いている朔がいることも、確かであった。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9428z/>

---

朔望の月

2011年12月29日14時46分発行